

八重山郷友会における伝統芸能と「八重山イメージ」の形成について

——本土復帰後の「九州バガースマの会」の活動を中心として——

拓殖大学 桃塚 薫

1. 目的

本発表の目的は、本土における八重山郷友会の歌三線と舞踊を中心とする伝統芸能活動を通じて、八重山出身者、その子孫そして本土の人々の「八重山イメージ」がどのように形成されていったのかについて明らかにすることである。

発表者はこれまで八重山という地域に焦点を絞り、本土在住者や本土出身の八重山居住者が、八重山古典音楽（歌三線）の学習を通じて複数の「八重山イメージ」を形成する過程に着目してきた（桃塚 2015）。しかし、1990年代のいわゆる「沖縄ブーム」以前の本土における八重山の伝統芸能活動に関しては、1928年の八重山芸能団東京公演を除いて、社会学的研究で言及されることは少ない。そこで本発表は、沖縄の本土復帰から1980年代までの時代における九州の八重山郷友会に着目し、具体的にどのような伝統芸能活動が行われたかについて考察する。

2. 方法

九州の八重山郷友会創立10周年記念誌として発行された会誌『あんつく』（石垣 1983）の内容分析を中心とする。同誌は、同郷友会会員や八重山関連の各種団体関係者による寄稿のほか、八重山や同郷友会に言及する多数の新聞記事、八重山文化を紹介する出版物の切り抜きによって構成されており、切り抜き帳のような誌面づくりが特徴的である。これらの記事には同会の伝統芸能活動を紹介する記述が多数含まれる。なお、分析に際しては、同時代の他の郷友会資料を併用し、当時の活動を知る関係者へのインタビューも行う。

3. 結論

この研究で明らかになるのは以下の点である。同会の伝統芸能活動は、主に八重山1世を中心とする男性と女性を中心となって行われた。この活動は一見したところ、琉球とは異なる八重山文化の独自性を八重山人が内地で強く主張するという「遠隔地ナショナリズム」であり、故郷に対する1世のノスタルジアを喚起し、八重山の伝統文化を2世以降で紹介するという特徴を持った。しかしながら、同会の八重山文化に対する態度は、会の内と外とでは大きく異なっていた。郷友会内部においては、八重山伝統芸能、琉球古典芸能、そして内地の伝統芸能との共演が行われた。それに対して、本土の観客に対しては八重山の独自性をアピールする活動が行われた。これらの活動は、人々の「八重山イメージ」を能動的かつ重層的に作り上げていった。

4. 参考文献

石垣松子 編, 1983, 『「あんつく」第2号 八重山郷友九州バガースマの会創立10周年記念誌』, 八重山郷友九州バガースマの会事務局.

桃塚薫, 2015, 「八重山古典音楽の演奏と「沖縄イメージ」の複数性について——八重山移住者の唄三線の事例から——」, 第88回日本社会学会大会報告配布資料.